『3･4･5歳児の生活と5歳児の育ち』
～一人一人が自分らしさをだしながら、育ちあう姿を見つめて～

四国大学附属幼稚園　　廣瀬　睦実　　家元　崇

はじめに

本園は、徳島県の清流吉野川北岸に位置する四国大学のキャンパス内にあり大学講師や学生との交流も盛んにもたれています。大学構内にはたくさんの樹木があり、幼児は新緑や紅葉、木の実など四季折々の自然を身近に感じながら園生活を送っています。

自然に恵まれた環境の中で、幼児一人一人がのびのびと楽しい集団生活をし，こころとからだの調和のとれた豊かな人間性の芽生えを養うことを教育目標に掲げ

明るく元気な子
たくましい子
豊かな心をもつ子

を目指し、日々保育にあたっています。その中でも、幼児の心の充実を図り、豊かな感性、自分で考え工夫する力、自分で表現し行動する力をもつ子を求め、様々な体験を重ねて体全体を使って遊ぶこと、五感を通して感じ、学んでいくこと、人とのかかわり、創造力などを大切にしています。

研究にあたって

本園の幼児は、人とのかかわり、環境とのかかわりを通してのびのびと遊び、園生活を楽しんでいます。自分たちで遊びを見つけ取り組む中で、夢中になって遊び、考え、創意工夫しながら、自分の思いや願いを実現しようとしています。そこで教師は、幼児一人一人の生活をみつめ、内面の育ちを丁寧に読み取り、そこに適切な援助をしていくことが必要だと思われます。

３歳児では、教師との信頼関係を築き、園生活の楽しさが感じられるように。

４歳児では、友だちとのかかわりを通して喜びや葛藤を味わう経験を積み重ね、広げられるように。

５歳児では、一人一人が自己発揮し、友だち同士影響しあいながら、仲間として、一緒に生活することが楽しいと感じられるように育んでいくことが大切であると考えます。３・４・５歳児のそれぞれの時期に必要な様々な経験の積み重ねが５歳児後半には人間関係が深まり、友だちと楽しく活動する中で、共通の目的を見つけ、工夫したり、協力したりすることができるようになると思われます。

しかし、日々の保育を振り返った時、一見、充実したように見える遊びも、幼児の思いを実現しようとするあまり、発達段階や個々の内面に添っていない教師の援助になったり、経験させたい事柄を求めすぎる援助になってしまいがちであるなど、幼児から生まれた遊びがいつの間にか、教師の思いが先行した保育になってしまうこともあるのではないかと懸念されます。

今回、「３・４・５歳児の生活と５歳児の育ち」というテーマで研究をすすめる中で、教師は幼児のあるがままの姿を受け止め、個々に応じたあたたかいかかわりができているか。各年齢の発達や特性をふまえた応答的な援助ができているか。そこで、幼児一人一人が自分らしさを素直に発揮し、心から楽しい、おもしろいと感じ、友だちと共鳴しながら、育ちあうことができているかなどについて見直していきたいと思います。

研究の進め方について

まず、カリキュラムの見直しを行いました。幼児が日々主体的に友達同士かかわり合いながら遊びを繰り広げる中で、それぞれの年齢にふさわしい発達を見通した生活ができているのか、各年齢の生活・遊びをピックアップしそれぞれの特性について話し合い、発達状況を共通理解していきました。

そして、保育のさまざまな場面を捉え、一人一人の幼児の心に寄り添った援助や適切な環境構成ができているかをみつめながら、一人一人がその子らしさを発揮している場面や、援助により育ちにつながっている場面を取り出し、事例として記録しました。

また、毎日の職員間のミーティングを通して、その日心に残った幼児の姿を伝えあったり、時には、遊びの場面をビデオやカメラに収め、保育を振り返りました。その中で、保育の見直しを行い、反省すると共に、幼児と教師の思いのずれについても考えていきました。

研究の内容について

各年齢の特性を探りました。生活する姿を取り出し、見直していく中で、その年齢に合わせた保育の重要性を感じ、3 歳児では出会いを大切に、4 歳児では経験を広げ、5 歳児では生活を深める保育を大切にしていきたいと考え、保育に取り組みました。また、援助についてもポイントとして整理しました。

保育の取り組み

３歳児は、ほとんどの幼児が初めての集団生活です。一人一人が違った環境の中で育ち、発達にも大きな個人差が見られます。園生活において様々な出会いを経験し、ありのままに自己を表出する中で感じたり確かめたり、思いを伝えたりしながら成長していきます。そこで、３歳児では出会いを大切にした保育を心掛けています。

４歳児は、生活の様々な場面や状況の中で、感じたことや考えたことを自分なりに言葉や動きで表現しようとします。また、何でもやろうとするエネルギッシュな行動力や強い自己主張が表れる時期でもあります。その中でいろいろな感情体験を重ねながら、人・物などに進んで働きかけて、自己の世界を広げ楽しんでいこうとする姿が見られます。４歳児では３歳で経験したことを広げていける保育の展開を心掛けています

５歳児は、身近な社会や自然に興味・関心をもち、それらを自分たちの生活に取り入れながら、試したり工夫したりして遊ぶ姿が見られます。また、３歳・４歳の時にため込まれた生活経験やいろいろな感情体験が基盤となり、一人一人が自己発揮し、友達同士影響し合いながら仲間としてのつながりを深めていくようになります。５歳児でないとできない活動を生活の中に盛り込み、さらに経験を深めていけるよう心掛けています。

援助の要点として

３歳児

・教師は幼児のあるがままの姿を受け入れ、心の安定を図り、興味や関心に基づいた直接体験ができるようにする。

・幼児との信頼関係を築き、自分らしさを出しながら人とかかわる機会が多くもてるよう配慮する。

・集団生活の中で一人一人を大切に捉え、遊びの中での行動や呟きに心を傾け、寄り添い支えていくことで、それぞれが自己主張できる場や機会を保障する。

４歳児

・一人一人が自分の思いを素直に出して相手に伝えることの心地よさを感じる経験を大切にしていく。

・遊びのおもしろさと共に友だちと一緒にいることの楽しさを味わえるようにする。また、遊びや友だちのよさに気付き、様々な体験ができるよう働きかける。

・幼児が試行錯誤しながらも友だちと一緒に遊びを進めていく過程や、様々な葛藤体験を乗り越えていこうとする過程を大切に受け止め援助していく。

５歳児

・一人一人が大切な存在であることを感じながら、友達同士認め合えるクラスづくりを心がけていく。その中で、それぞれが自信をもち、主体的に生活していけるよう援助していく。

・遊びの中で共通の願いや目的が生まれ、工夫したり協力したりする楽しさを十分に味わえるよう援助していく。個の成長が集団へと広がり深まっていく過程を大切にしていく。

・年少・年中組での多様な経験が年長組の生活の中に十分生かされ、生きる力の基礎となるよう見通しをもった援助を心がける。

実践事例として

様々な体験を重ねて体全体を使って遊ぶこと、五感を通して感じ、学んでいく直接体験。子どもたちの五感に働きかける体験を大切にしています。心にため込むたくさんの体験がある中から、砂や水にかかわる遊びをとりあげました。

３歳児６月の事例です。

雨上がりの朝、水たまりがたくさんでき、いつもとは違う園庭に興味をもった子どもたち。汚れを気にすることなく開放的に遊びはじめました。子どもたちは、環境に自ら働きかけ自分なりに遊びだして行く姿を教師に受け止めてもらうことで、安心して遊びに取り組みます。そして、感触を体全体で感じ取り楽しみながら遊ぶ中で心の中に様々なものをため込んでいっています。

４歳児６月の事例です。

一人、二人の山づくりから始まり、次第に友だ

ちが集まってくることでダイナミックな活動になってきました。教師も遊びに加わり、遊びが広がるよう、ヒューム管や木の板を準備しました。全身で開放的に遊ぶ中、友だちとイメージを共有することで楽しさがふくらみました。「ここにトンネルを作るよ」「そっちから水ながしてよ」と考えをだしあいながら遊びは広がり、２日、３日と継続した活動になりました。砂や水の感触を存分に味わうとともに友だちと一緒に遊ぶ楽しさ、おもしろさを感じることができ、友だちと、教師とつながりを深めることができたようでした。

５歳児７月の事例です。

年長児全員で海岸に遊びにいきました。砂浜のごみ拾いをしたあと、どこまでも広がる砂浜で裸足になり思う存分身体を動かして活動しました。友だちと力を合わせ、大きな山をつくり、深い穴を掘りそこに巧技台や滑り台、平均台を持ってきて遊園地をつくりました。考えたり、友だち同士相談したりしながら進めていきます。出来上がった遊園地では幼稚園の砂場では感じられないスケールの大きな活動を体験でき、波の音、潮風、砂の感触を全身で感じることができたようです。幼児は身体を使って、五感を通して、豊かな体験をもちながら育っていきます。身近な自然に触れる中でその大きさ、美しさ、不思議さに心を動かされ、繰り返し遊びながら様々な事象に興味や関心をもつようになります。教師は幼児が環境に好奇心や探究心をもってかかわり、豊かな体験ができるよう、意図的、計画的に環境や保育を構成することも大切であると考えます。

人とかかわり、喜び、感動、葛藤、挫折を味わう感情体験。友だちとのかかわりの中でおこるトラブルをとりあげました。

３歳児５月の事例です。

幼稚園の生活にも少しずつ慣れたころ、ありのままに自己を表出し始めます。友だちが見ていた絵本を横からのぞいているうちに自分がページをめくりたくなって取り上げようとしています。教師が仲立ちになりますが、この時期、譲り合うことや相手の気持ちに気付くことは難しいようです。しかし、このような偶発的な出来事がきっかけとなって友だちの存在やおもいに気付いたり、人に譲るという社会的な態度の芽生えが育っていくと思われます。

４歳児６月の事例です。

サッカーをしていてどちらがゴールキーパーをするかで喧嘩になりました。友だちとのつながりができてくると、自分の思いを出し合うようになります。結局、どちらも引っ込みがつかなくなり、泣き出してしまいました。教師は、お互いの気持ちを聞き、思いに寄り添いながら受け止めていきます。様々な葛藤や挫折も繰り返し経験しながら、相手の思いや考え方の違いに気づくようになり、判断する力が生まれると思われます。次第に仲間として楽しく遊ぶことができるようになっていくと考えます。

５歳児９月の事例です。

ドッチボールのチーム分けをめぐって意見が衝

突してしまいました。教師は子どもたちに解決をゆだね、遠くから様子を見守りました。一人一人が意見を出し合いながら、折り合いをつけたり、我慢して友だちの意見に合わせる幼児の姿が見られ、他者を受け入れようとする気持ちや自分自身の思いをコントロールすることができているように見えました。結果として、自分たちでうまくチームを分けることができ、ゲームの楽しさを味わいながら活動することができていました。

園では、ウサギ、カメ、ハムスターの飼育をおこなっています。飼育動物や小動物の世話を通して、様々な感動があります。時には誕生や死に直面することもあり、生命を大切にしようとする気持ちややさしさも育れてきます。

各年齢の経験と育ち、３．４．５歳のつながりについてお店屋さんごっこの事例を通して、みていきました。

幼児の生活の中心は遊びです。特にごっこ遊びは、３．４．５歳児と年齢を問わず、日常いたるところで繰り広げられており、中でも、お店屋さんごっこは、日常の遊びとしてしっかりと定着しているように思われます。子どもたちは、生活に密着した身近な遊びの中で自分の思いをありのままに出したり、同じ場にいる友だちとかかわって遊びを楽しんでいます。

次の事例は、お店屋さんごっこを楽しむ幼児の姿です。３歳・４歳・５歳、それぞれの時期にどのような経験をし、そこになにが育っているのか、また、なにが育とうとしているのか、そして、必要な教師の援助や環境構成について、実践を通して考えていきました。

実践事例１

「大きい組さんのお店屋さんってすごい！」

３年保育３歳児１０月の事例です。

●環境との出合いの中で

ある日、年長組の数名がお客さんを誘いにきました。ままごと遊びの好きなＳ男は「先生、お店だって」と興味津々です。子どもたちは行きたそうに「早く行こう」と担任に声を掛けます。Ｓ男も一人で年長組へ行くのは不安な様子。「じゃあ行こうか」の声に近くで遊んでいた子どもたちは２階の年長組のお店へ走り出しました。

年長児が手際よくハンバーガーを作ったり、ポテトを袋に詰めたりします。その様子をじっと見ているＳ男たち。年長児に言われるままに並んだり、サービスを受けたりしてお店でもらったものを両手にしっかり握り締め満足そうに自分のクラスへ帰りました。

〈よみとり〉

年少児にとって、お店やさんで、やさしくしてくれたり、いろいろなことができたりする年長児は、憧れの存在です。年長児の姿を見ながら年少児はおもしろいものに心を動かしたり遊び方を学んだりしている様子が伺えます。　そこには先生と一緒に行くことで生まれる安心感が土台となっています。教師は子どもたちと一緒に買い物を楽しみながら、一人ひとりが心を動かしているものに気付き、それを丁寧に認め共感していくことが大切だと思いました。

●子どもの発達を理解し認める

自分のクラスへ帰り、ままごとコーナーに戻り遊んでいるＳ男。しかし先程とは遊び方がやや変化しています。明らかに年長児のお店のまねをしているのがわかります。Ｓ男「１００円です」といつも遊んでいるフェルトのケーキを差し出しました。教師は「はい！ありがとう。１００円どうぞ」と紙に書いた１００円を渡しました。

〈よみとり〉

年長児の真似や思いついたことを声に出しながら先生とのやりとりを楽しむことを見つけ出したＳ男。教師はＳ男がそれを心ゆくまで楽しめるように一緒に遊びながら、周りで見ている子どもたちがいることも頭の隅におき、楽しそうな雰囲気をかもし出しながら遊ぶようにしました。Ｍ子やＳ子が「やってみたい」「その場にいたい」という気持ちでじっと見ているのがわかりました。

●周りの子どもとのかかわりをひろげる

いつの間にかＭ子やＳ子も、お店やさんのまねっこに参加して、それぞれが言葉を発し、Ｓ男と同じように先生と遊ぶ楽しさに満足しているようです。教師は帽子を作り、皆にかぶせました。すると、「Ｓちゃんもいっしょだ・・・」とＭ子は嬉しそうにつぶやき、にっこり笑う姿がみられました。同じお店の人というイメージの中で友達同士盛んに会話が弾みより楽しそうな雰囲気になりました。

〈よみとり〉

年長児と同じような帽子をかぶることで、真似をした遊びではあるが満足感を味わうことができたようです。帽子という同じ物をもつことが仲間としての条件になり、「自分と先生」だった遊びから「自分と〇〇ちゃんと先生」と徐々にかかわりが広がっていきました。教師は、遊びの楽しみが重なる場面を通して幼児同士をつないでいくことが大切だと感じました。

実践事例２、

「お寿司屋さんごっこしよう」

２・３年保育４歳児　６月の事例です。

●経験したことを遊びに生かしていく

材料箱の中からお寿司のトレーを見つけたＴ男は、一緒に遊んでいたＫ男を、お寿司屋さんごっこに誘います。Ｋ男はすぐにままごとコーナーからフエルトでできたお寿司をとってきますが、Ｔ男は自分たちで作ることを提案します。

〈よみとり〉

T男は、普段からお店屋さんごっこが大好きで、砂場でも、プリンやごちそうを作っては、「先生、レストランするけんきてよ」などと、近くで遊ぶ教師や友だちに声をかけて楽しんでいます。また、年少組の時も、年長組のお店屋さんに喜んで出掛け、買い物を楽しむ姿がみられました。その中で、年長児がかけてくれる言葉や、やりとりを学んできたと思います。その時々の経験がお寿司屋さんごっこにつながり、自分たちの手で形にしようと考えたのでしょう。一方、K男は年中組4月の入園のため年少組の経験がないので、発想に違いが出たと思われます。

●考えたことが実現していく喜びを感じる

Ｔ男とＫ男は教師から画用紙をもらうと寿司づくりを始めます。教師もＴ男の誘いで仲間に入り一緒に会話を楽しみながらお寿司屋さんの準備を進めていきました。

〈よみとり〉

自分の提案が受け入れられて、遊びが進んでいくことでT男はいっそうイキイキとした表情で遊び始めました。画用紙で作った巻き寿司がそれらしく見えたこと、その場の雰囲気がこれから始まろうとするお寿司屋さんごっこを期待させるものだったことから自然と「いらっしゃいませー」という言葉として出たのだと思われました。教師はT男の思いに寄り添い一緒に遊ぶことでイメージが具体化され実現できるよう努めました。

●仲間が集まり遊びが広がる

Ｎ男も遊びに加わり、お寿司屋さんを開店しました。女の子たちが買い物に来てくれ、会話のやり取りも楽しそうです。その中で、Ｈ子に「お金は入りますか？」と尋ねられ、あわてて相談する３人の男児。声をそろえて「１００えんです」と笑顔で答えます。Ｔ男は４歳児の他のクラスにも誘いにいきます。たくさんの友だちや先生が買いにきてくれたので、３人の男児はとても満足そうでした。

〈よみとり〉

寿司づくりをしながら３人がイメージを共有していく様子が伺えました。また、Ｔ男のリードで遊びが進み、Ｋ男、Ｎ男もＴ男の言動に同調することで、一緒に遊ぶおもしろさを味わい、仲間としての意識が生まれたことを感じ、嬉しく思いました。

●降園時の話し合いで

降園時、クラスの話し合いの場で、「お寿司屋さんごっこをして楽しかったです。明日もするので来てください」とＴ男が発言しました。他の幼児からもお店屋さんごっこがしたいという意見があったので、教師は翌日の活動につながることを願い言葉をかけてこの日は終わりました。

〈よみとり〉

降園時、Ｔ男が一日を振り返り楽しかったことを周りに伝えたことは、遊びをリードしていくことや友だちと一緒に遊ぶおもしろさを味わったことからの満足感の表れであり、明日の遊びへの期

待も込められていると受け止めました。

３人から始まったお店屋さんごっこはクラスみんなの活動につながっていきました。役割を自分たちで決めていく中で、それぞれの幼児がやりたいことを主張し、トラブルになる姿もありましたが、教師が一人一人の思いをくみ取り、幼児同士の気持ちをつないでいくことで、我慢したり、譲ったりすることもでき、遊びの広がりがみられました。

４歳児の６月では、まだ自分たちだけで遊びを展開していくのは難しいのではないかと思います。しかし、教師が幼児の意欲の高まりを逃さずキャッチし、そこに教師の願いやねらいを意図的に絡ませながら援助していくことで幼児は遊びを継続することができ４歳児なりの充実感や満足感を味わうことができるのではないでしょうか。

教師は幼児の思いや発想に寄り添いながら、イメージを探り、より楽しく展開していけるよう環境構成などにも心掛けることが大切であると感じました。

実践事例３

「お客さんに来てほしいのに」

２・３年保育５歳児　１１月の事例です

●遊びのヒン　　トをもらう

数日前からお店屋さんを開いている５歳児のＳ子、Ｎ子、Ｋ子は、その場に集まるもののお客さんが来てくれないことから、なんとなく時間を過ごしている様でした。そんな時、４歳児が担任と一緒にお祭りやさんの招待状をもってきます。翌日、３人はお祭りやさんに行き楽しく遊びました。クラスに帰ると、早速、自分たちで紙とマーカーを準備し、招待状を作り始めるのでした。

〈よみとり〉

教師は４歳児が持ってきた招待状をＳ子らのお店屋さんのヒントになればと思い、みんなの目に留まる場所に掲示しました。カラフルに書かれている招待状を前に幼児たちはお祭りやさんのイメージを膨らませ心がときめいたことと思います。

翌日、４歳児のクラスに遊びに行き、たくさんの幼児が楽しんでいる様子を見て、Ｓ子、Ｎ子、Ｋ子は自分たちも楽しさを味わうとともに、羨ましさも感じたようです。３人には招待状が自分たちの思いを伝え、相手の心をつかむ、素敵な手紙に見えたのでしょう。そして、自分たちのお店屋さんにも来てほしいという３人の願いが招待状作りにつながっていったと思われます。

５歳児は、３．４歳児の経験をもとに、生活を深めている姿が見らます。周りからの刺激を受けながら試行錯誤していくことも大切な育ちにつながっていることがよくわかりました。また、教師が幼児の今ある課題を乗り越えられるよう、子どもの伸びようとする力を信じ、育ちを信じて、幼児一人一人の思いに添った援助をすることが大切であると改めて実感しました。

●経験を振り返る

お店屋さんごっこは、招待状を届けたことでお客さんが増えにぎやかになりました。ほかの幼児たちもこの様子をみて、お店屋さんに戻ってきました。遊びに来てくれた異年齢の幼児への積極的なかかわりや年少児に対して優しくかかわる姿もみられました。午後になってＳ子とＮ子がお店屋さんが開いていることを伝えようと４歳児のクラスを訪れます。そこでは、自分たちがしてい

ることを真似ている４歳児の姿がありました。テープで直接リボンを髪に貼り付けている様子を見て二人は顔を見合わせ、くすっと笑い、４歳児には何も言葉をかけずに手をつなぐとスキップをしてクラスに帰って行きました。

〈よみとり〉

４歳児の姿を通して自分たちも同じような経験をしたことを思い出しているようでした。直接、遊び方やくくり方を教えるのではなく見守っているようであり、そこには、“自分たちは年長組なんだ”という自信とゆとりが感じられ、４歳児の姿に共感しているようでもありました。Ｎ子、Ｓ子に４歳児を認めたり、温かく受け止めたりできる心が育まれていることを嬉しく思いました。

＜考　察＞

各年齢の育ちと教師の援助についてまとめました。

身近な人とかかわりながら、自分の世界を広げていく姿と、したいことが実現していく姿が明確に見えてきました。

３歳児は、自分のあるがままの姿を受け止めてくれる大好きな先生の存在が、心地よさを実感して生活する基盤となります。安心できる環境の中で、興味をもったことを思いのまま行動に移したり、年長児を真似たりしながら自分たちの遊びをみつけます。教師は幼児の遊びへの思いや願い、実現したいことを把握し、なりきって遊べるよう幼児の心に寄り添いながら環境を整えていく必要があると思われます。

４歳児は、友だちのことが大好きになっていく時期でもあります。友だちとの遊びを進めていく中で様々な思いや感情をストレートに出しながら自分らしさを発揮しています。トラブルへの対応も幼児一人一人の心の葛藤を理解しながら、自分の思いを素直に出して相手に伝えることの大切さを感じられるよう援助していくことが大切だと思われます。

５歳児は、豊かなものや人とのかかわりの体験を基盤にして、自分たちで遊びを作り出しています。３歳、４歳児の生活で培われた人間関係が基となり、友達同士影響しあいながら仲間としての絆が強まります。そして、友だちの良さや持ち味を互いに認め合える関係になり一緒に行動する嬉しさを感じて生活しています。また、異年齢児とのかかわりの中で見られる優しさや思いやりのあるかかわりも、自分が年少児のころに優しくされた経験が、気持ちの育ちに繋がっていると思われます。教師は、５歳児の全ての育ちを認め、受け止めていくことで自己肯定感の育ちを促していきたいと思います。そして、幼児同士で考え、解決し遊びを進めていける仲間作りを支えていかなければならないと改めて感じています。

続いては5歳児の協同的な学びについて事例をあげました。

幼児が協同して遊ぶようになるためには、教師やほかの幼児とのかかわりの中で、自ら行動する力を育てることが必要になってきます。また、かかわりを深め共に活動する中で共通の目的が生まれ、考えたり、工夫したりしながら、心を揺り動かす体験を積み重ねていくことが大切だと考えます。おばけやしきごっこを展開する５歳児の姿から幼児の協同的な学びに視点をあて、考えていきました。

実践事例４　「おばけやしきごっこしよう」

２．３年保育　５歳児

９月から１１月の事例です。

●共通の目的に向かって、友だちとアイディアを出し合う

夏休みに遊びに行き、楽しかった経験を遊びに取り入れ楽しむY男。大型段ボール箱をつかってお化け屋敷作りが始まります。Y男と教師が段ボール箱を運んでくる様子を見て幼児が集まってきました。Y男の思いに、賛同した幼児が、いろいろな意見を出し合いながら工夫していきます。

〈よみとり〉

Ｙ男は自分の体験の中から次々とイメージを膨らませ遊びを進めていきました。Ｙ男の思いに賛同する仲間を受け入れ、“おばけやしき”をつくりたいという共通の目的に向かってそれぞれの意見を取り入れながら進めていったことで、よりおもしろい遊びに発展したように思います。
教師は、アイディアをすぐに実行に移すことができるよう、いつでも素材や用具を出せるなど環境を整えておくことが大切だと思いました。また、困った時や遊びに行き詰った時は、仲間として相談相手になったり、遊びのヒントを出したりするなど応答的な援助をすることで、幼児が自分たちの思いの実現に向けて遊びを展開していくことができるよう見守ってきました。

●互いの考えを伝えあう中で、友だちの考えを受け入れる

部屋いっぱいに出来たお化け屋敷で遊んでいたＹ男、Ｇ男、Ａ男や女児数人のところへ、外から帰ってきたＳ男、Ｍ男がやって来ました。お化け屋敷に入るとすぐに出てきて「こんなん、お化け屋敷とちがうわ」「だって、ちっとも怖くないもん」と発言します。Ｙ男たちは少し強い口調で反論します。しかし、Ｓ男たちは「だって、お化け屋敷ってかいてないし、ほんもんのお化けもおらんでー」と言い、少しにらみ合い状態になりました。その様子を見ていたＥ子がＭ男の言葉を聞いて「Ｙ男君、看板がいるなあ！」と提案し、Ｙ男も賛同して看板作りが始まりました。いつのまにかＳ男・Ｍ男も加わっていました。看板が出来上がるとさっそく入口のドアにたてかけ、Ｙ男自身もドラキュラのおばけに変身することを思いつきます。

〈よみとり〉

Ｙ男たちは自分たちが作ったもので満足して遊んでいましたが、Ｓ男、Ｍ男の言葉に反発し嫌な気持ちになってしまいます。しかし、そのことがきっかけで看板作りや自分自身がお化けになることを思いつきました。お化け屋敷を作るという自分たちの共通の目的に向けて、困った状況を乗り越えながら、考えたことを実行したり意見を出し合ったりする姿が見られました。また、その中で友だちのアイディアを遊びに取り入れていくことで、少しずつ遊びが変化し、より楽しいお化け屋敷ごっこになっていったと感じました。

普段、友だちの思いを受け入れにくいＹ男ですが、お化け屋敷作りをしたいという強い思いと遊びをより楽しいものにしたい気持ちが大きくなってきたため、友だちの発言にも素直に耳を傾けることができたのだと思います。マイナスの感情をプラスに変換し、遊びを進めていく姿にＹ男の成長を感じました。

●折り合いを付けながら、友だちと遊びを進めていく

お化け屋敷ごっこは、小さい組や他のクラスのお友だちも遊びに来たり、段ボールを繋げたりと少しずつ変化しながら、遊びは広がっていきました。ある日、壊れていたところを直していたＮ男

が「もっとすごいお化け屋敷にしたいから、怖くて大きな入口を作らん？」と発言。周りの幼児から様々な意見が出てきて、しばらく遊びが中断します。しかし、みんなの話を黙って聞いていたＡ男が強い口調で「怖いお化け屋敷になった方がおもしろいし、お客さんもいっぱいくるから、入口はいるわ！」とみんなの意見をまとめました。「よし！みんなで作ろう」と気持ちが一つになり入口作りが始まりました。箱にそれぞれが絵具をぬったり、お化けの絵をかいたりしながらお化け屋敷はどんどん形を変えていきました。中には年少組用の明るい抜け道も出来ていて、小さい子が怖がらないようにと子どもたちなりの配慮も見られました。入口に立って案内する子、お化けになって脅かす子、カーテンを開け閉めする子などクラスの殆んどの幼児たちがかかわる様子が見られ、遊びが以前より盛り上がっていました。

〈よみとり〉

自分たちで作ったお化け屋敷をより面白くしようと考えたり、アイディアを出し合ったりして遊びを進めていく中で、意見がぶつかり遊びは中断してしまいました。しかし、Ｙ男やＭ子たちは互いの思いや考えに気付き、友だちの意見にも耳を傾け、自分たちで解決していこうと折り合いをつけながら乗り越えていくことができたと思います。遊びを面白く発展させると共に小さい子への思いやりの姿も見られ成長を感 じました。

お化け屋敷の遊びを通して、みんなで共通の目的をもって実現しようと話し合ったり、協力したり、役割分担をしたりして遊ぶ姿には、協同的な学びがあり、毎日いろいろな幼児がお化け屋敷の遊びにかかわることで３カ月もの長い間継続して遊びました。そのことでクラスが一つにまとまり一体感が現れ、仲間同士のつながりも強くなったと考えます。

お化け屋敷ごっこから見られる協同的な学びについて、以下３点に整理してまとめました。

〇共通の目的に向かって、友だちと相談しながら遊びを進める

・幼児にとって友だちの存在は大きく、友だちと生活しながら感動体験を共有したり、イメージを伝え合ったりして、互いに影響を及ぼしあいながら遊びの興味・関心を広げていくと考えます。いろいろな友だちとかかわり、遊びを進めることで、充実感や満足感をもち、それが自信となり自分の遊びを広げていこうとする意欲が育ってくると思われます。

・教師は、それぞれの幼児がイメージを湧かせ、共通の目的となるように、材料や道具をすぐに取り出せるよう準備したり、幼児同士が相談しやすい状況をつくるなどの援助が必要であると考えます。また、じっくりと遊び込める時間と場所を保障するなど、環境の構成も必要です。

〇友だちのよさや持ち味を感じながら、新しいアイディアや役割を生み出していく

・「こんなんお化け屋敷とちがうわ」の発言は、幼児の行動を温かく見守ってくれる教師の存在のもとで、自分の気持ちをストレートに出せたと思われます。この言葉がきっかけで相手を傷つけマイナスの感情を味わわせてしまう結果となりますが、この感情体験を乗り越えて遊びを進めていくことで、生かし合える友達関係に育っていきました。幼児にとってこのマイナスと思われる体

験が意味のあるものとなるよう援助していかなければならないと考えました。

・この時期になると、友だち同士でトラブルが発生しても当事者だけでなく周囲の幼児も巻き込んで考えたり、意見を出し合ったりしてより良い方法を考えていこうとする姿が見られます。教師はすぐに対処するのではなく、幼児を信じトラブルも問題解決に向かう過程と捉え、幼児に任せ、自分たちで解決しようとする力の育ちにつなげていきたいと思いました。

○人とのかかわりの中で刺激をうけながら自分の見方や考えを広げる

・幼児は、日々の生活の中で自分の思いやイメージが仲間に受け止められていると感じることで、安心して自分らしく様々な活動に関わっていくことができます。「仲間がいるからしてみる」「仲間と一緒にやりたい」という思いをしっかり教師は受け止め、集団の中で一人一人が自己発揮できるように考えていかなければならないと思いました。

・クラス全体の活動となった時、幼児の主体性を生かした遊び、仲間の課題として取り組むために大切なことは、自分たちでルールを作り遊びを進めていくこと、一人一人の幼児の思いに互いが気づくこと、そしてみんなが力を合わせることです。クラスみんなで取り組んだ結果が本当に楽しかったと感じることが協同性、仲間意識につながると考えます。

まとめと課題

この研究を通して、発達の特性を探る中で、各年齢の育ちに合わせた保育の重要性を感じ、3 歳児には“出会いを大切にする”　4 歳児には“経験を広げる”　5 歳児には“生活を深める”ことを大切にした保育の取り組みを行ってきました。実践を通して、３歳児での経験や育ちが、４歳児の生活につながり、生かされ、新しい学びや友達関係を育む要素となり、５歳児での生活になだらかに連動しつながっていることが、確かなものとなって見えてきました。そこには幼児一人一人の育ちに合わせた教師の適切な援助が必要であることを検証できたと考えます。

好奇心に満ちた 3 歳児の時期には、素直に感情を表し自己を表出する幼児の姿を受け止め、思うままに活動することが豊かな体験となるように援助していくこと。3 歳児で培った豊かな体験は４歳児の育ちに生かされ、自分で考え自分の力で行動しようとする原動力となるよう広げていくこと。そして、友だちを求め、一緒に遊ぶ中で、様々な葛藤や挫折を経験する感情体験を乗り越えることが、たくましい心を育むと考えます。5 歳児では、これらの多様な体験の積み重ねがより

協同的な学びとなるよう自己肯定感につなげ、仲間としての絆をつくっていくことが不可決です。友だちと一緒に遊び込む中で、自分らしさを出し、試行錯誤を重ね自分の思いを実現したり、感情をコントロールしたり、相手の気持ちを思いやったりしながら、心に充実感や達成感を味わい、生きる力の基礎へとつなげていくことが重要です。更に幼稚園で身に付けた力が小学校生活にスムーズに接続されるよう、それぞれの発達や保育を踏まえ、子どもたちの育ちの連続性を確かなものにしていく必要性を感じました。

　幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものです。幼児期の特性を踏まえ、教師は幼児の主体的な活動が確保されるよう計画的に環境を構成していかなければならないと考えます。その上で、幼児一人一人がこれらの直接体験・感情体験を通して何に心を動かしているのかを読み取り、幼児の探究心や好奇心を呼び起こし、幼児が主体となって遊びを充実させていくために、あらゆる援助をしていくことが必要です。幼児と共に生活していく中で、教師は幼児を見る目や感性を磨き、自分自身をしっかり見つめていくことが大切であり、教師間でも育ち合えるよう、よりよい人間関係を保持し、教師としての資質を高め、子どもたちにとって豊かな生活が送れるような魅力あふれる幼稚園であることを願い、更に研鑽していきたいと思っています。

「ぼくたちが育てた愛の葉っぱで藍染をしたよ。」

完